

會學濟經學大國帝都京

# 叢論經濟

號三第卷十五第

月三年五十和昭

## 論叢

勢力加速度の法則……………文學博士高田保馬

日本經濟理論に於ける主體性の發展……………經濟學博士石川興二

## 時論

地方稅制の改革を論ず……………經濟學博士汐見三郎

## 研究

ナチス住宅政策の原理……………經濟學士中川與之助

金史食貨志に見はれたる貨幣思想……………經濟學士穗積文雄

貨幣の資本的考察……………經濟學士中谷實

## 說苑

北支に於ける人口の分布と變動……………經濟學士菊田太郎

農業に於ける保險と信用の問題……………經濟學士西藤雅夫

パウル・アルント 日本に於ける低勞賃……………經濟學士青山秀夫

## 附錄

## 彙報

## 外國雜誌論題

## 日本經濟理論に於ける主體性の發展

石川 興 二

## 一 日本經濟理論の性格

日本經濟理論の構造を主體性の發展を中心として考察したいと思ふのであるが、これが爲めには先づ日本經濟理論の性格について一應考察することが必要である。

日本經濟理論の性格を明にせんが爲めには、先づその生的基礎<sup>1)</sup>について考へなければならぬ。從來我國に於て行はれた經濟學は、西歐に於ける市民社會と共に成立發展したところのものである。従つてそれは根本に於て個人主義的立場に立つて居り、日本並に東亞に關する經濟學的研究も多くこの學的立場よりなされたのである。然るに、こゝに日本經濟學と云はるゝところのものは、日本の現代に於て確立せしめらるべきところのものである。既に述べたるが如く、日本は西歐諸國と異なり「天皇を中心とせる國民共同體」を以てその國民史を一貫せる根本構造即ち國體としてゐるのである。中世の封建社會もこの國民共同體を基礎としその上に於て成立發展衰落したるが如く、近世の市民社會もこの基礎の上に成立發展し今や没落しつつある。今日の日本經濟學はかくの如き國民的並に時代的生の基礎に於て成立つのである。

従つてそれは、この市民社會的現實をより高き實在に變革するに役立つところの實踐學としての構造を有し、

1) 拙稿「日本經濟學の根本原理」(經濟論叢第四十九卷第一號)參照

歴史的部分、理論的部分、政策的部分より成る。<sup>1)</sup> この日本經濟學の理論的部分が日本經濟理論である。

この日本經濟學の研究對象は、世界的實在に於てあるところの日本の經濟的實在である。<sup>2)</sup>

次にこの對象を研究する立場について見んに、日本の經濟的實在をその研究對象とするもこれを以て直ちに日本經濟學であると云ふことは出来ない。この實在は諸種の立場より研究し得られるのであつて従つてそこに諸種の經濟學が成立ち得るのである。先づ資本家階級の立場に立てばこの階級的主體性を貫くところの資本主義經濟學が成立つ。即ち資本家階級なるものは、利潤の獲得を以て眼目となすが故に、この爲めに資本主義制度を保持せんとするものである。また無産者階級の立場に立てば、この階級的な主體性を貫くところの社會主義經濟學が成立つ。即ち無産者階級は資本主義制度の下に於て資本家階級に壓迫せられて居るが故にこの資本家階級を否定し階級なき社會を實現せんとするものである。また全體を支配する權力を擔當する階級即ち權力階級の立場に立てば、この階級的な主體性を貫くところの全體主義の經濟學が成立つ。それは權力的支配を強化することを眼目とし資本主義社會に於ける有産者階級と無産者階級の階級的對立に對してもこれを權力的に支配せんとするものである。これ等三種の經濟學は各々の階級的立場に立ちその階級的な主體性を貫くものであるが故に、階級經濟學と云はれ得るものである。日本の國民的實在に於ても、かゝる階級が見られ得るが故に、その各々の立場に於てかゝる階級經濟學が成立ち得るのであり、また現に成立つて居るのであるが、それ等は日本經濟學としての特色を有するものではない。むしろ第一のものは英國を母國とするものであり、第二のものはマルクスに發し今日ロシアを母國とするものであり、第三のものは獨逸を母國とするものである。

1) 拙稿、前掲『日本經濟學の根本原理』参照  
2) 廣義の日本經濟學の研究對象については上掲拙稿参照

日本經濟學を日本經濟學たらしむるところの根本的立場は、日本の國民的實在の本質的構造であるところの「天皇を中心とする國民共同體」の立場である。この立場に立つときこの「天皇を中心とする國民共同體」の主體性を徹底せんとするところの日本國民共同體經濟學が成立つのである。それは諸の階級對立を止揚して天下億兆一人もその處を得ざるものなからしむるところの國民共同體を具體的に實現せんとするものである。これが爲めにはこの國民共同體の具體的實現に至るべきところの發展的理論的構造が日本の經濟的實在に於て明にされることを要する。これが日本經濟理論の研究課題をなすところのものである。マルクス『資本論』に於て階級なき社會としての「自由の國」に至るべき理論的發展的構造を明にされたがこれは要するに市民社會の成立發展沒落の理論的構造である。然るに日本經濟學が究明すべきところのものは市民社會を止揚して國民共同體の具體的實現に至るべき理論的發展的構造である。従つて前者は階級社會的立場に於て認識し得るものであるが、後者は國民共同體の立場に於てのみ認識し得るのである。即ち既に述べたが如く、我國民に於ては「天皇中心の國民共同體」を基礎としこれに於て諸の階級的社會が成立發展沒落して行つたのである。故にこの國民共同體の立場に立つ時はじめて日本の經濟的實在の發展的全構造が把握し得られるのである。これに反し階級的立場に立つてはこの全構造を把握することは出来ないのである。

この日本經濟理論の研究方法は、辯證法的發展的方法でなければならぬ。その經濟理論への適用ははじめてヘーゲルによりその『法の哲學』に於ける「市民社會論」の「欲求の體系論」に於て適切に示めされた。<sup>1)</sup>これはヘーゲルはその「緒言」に於て *Volkmehr ist in der philosophischen Erkenntnis die Notwendigkeit eines Begriffs die Hauptsache,*

1) 前掲、拙稿、參照。

2) 拙稿「ヘーゲル市民社會論と經濟學」(經濟論叢第三十八卷第一號)參照。

und der Gang, als Resultat, geworden zu sein, sein Beweis und Deduktion. 即ち哲學的認識に於ては概念の必然性が重要であり成果として生じた行程が論證であると云へるところのものを市民社會の經濟理論に適用したのである。この云は辯證法的論證が日本經濟理論に於ては、日本の經濟的實在全體の發展に適用されなければならぬ。即ち日本經濟理論に於ては日本の經濟的實在の辯證法的發展の構造が明にせられその最後の段階としての國民共同體經濟はこの辯證法的發展の成果として明にされなければならない。またヘーゲルは Die Bestimmungen in der Entwicklung des Begriffs sind einseits selbst Begriffe, andererseits, weil der Begriff wesentlich als Idee ist, sind in der Form des Daseins, die Reihe der sich ergebenden Begriffe ist damit zugleich eine Reihe von Gestaltungen; so sind sie in der Wissenschaft zu betrachten. 即ち開展される概念の順序は實在の諸形態の順序であると云ふて居るのであるが、日本經濟理論に於て展開される概念の順序も、日本の經濟的實在の展開の順序でなければならぬ。而してこの展開の成果として國民共同體經濟が論證されるのである。ヘーゲルがこの辯證法的發展的方法を、「欲求の體系論」に於て經濟理論に適用したことは經濟學史上劃期的なことと云はなければならぬ。マルクスはこの辯證法的發展的方法をヘーゲルより繼承して『資本論』に於ける市民社會の成立發展沒落を明にするところの經濟理論に用ゐたのである。而もマルクスは社會的階級の立場に立つたが故にその辯證法的發展は階級的對立の辯證法であつて、要するに「人類社會の歴史は階級對立の歴史なり」と云はれるところのものである。而も日本實在の發展に於ては常に「天皇を中心とする國民共同體」の基礎に於て諸の社會階級が成立發展しその相反の對立は最後にはこの共同體的基礎と矛盾するものとしてこの立場より止揚されるのである。かくして日本經濟

1) Hegel, Rechtsphilosophie, Einleitung. § 2.  
2) Ibid. § 32.

理論に於ては、日本の經濟的實在がその原始的な狀態より具體的な國民共同體に至るまでの發展が辯證法的に把握されなければならないのである。

この日本經濟理論の體系は、この辯證法的發展的方法を以て日本の經濟的實在を取扱ふことによつて成立つところのものである。ヘーゲルの「欲求の體系論」に於ては、先づ「諸欲求並に充足の様式」が辯證法的發展的に取扱はれた。次に「勞働の様式」が同様に考察された。第一は云はゞ富の需要論であり、第二は富の生産の論であるが最後にこの兩者の統一としての配分並に消費の論に相當するものが「財産と階級」として辯證法的發展的に展開された<sup>1)</sup>。日本經濟理論に於ても富の需要と生産と更に兩者の統一としての分配並に消費の各が、日本の經濟的實在について辯證法的發展的に考察されなければならない。かくて結局日本の經濟的實在全體の辯證法的發展の構造が明にされるのである。

終りにかくの如き日本經濟理論の素材は第一に日本の國民的實在に關する體驗であることは云ふまでもない。而もその理論的素材はこれまでの經濟理論に於ても準備されて居る。即ち、この日本經濟理論の中に展開せられる社會經濟並に權力經濟の理論は、既に西歐に於て成立した。即ち社會經濟理論はそこに於て特に社會機構が發展して居る英國に於て展開されたに對し權力經濟の理論はそこに於て特に國家の權力的機構が發展せる獨逸に於て展開された。日本經濟理論は諸社會階級の基礎としての「天皇中心の國民共同體」の立場に立つが故に、これ等階級的立場に立つものをその根底より理解し止揚し得るのである。かくてこれまで西歐より我國に取入れられたる資本主義、社會主義、全體主義の階級經濟學は、日本經濟學の立場に於て理解され止揚され、以てそこに最

1) 前掲、拙稿「ヘーゲル市民社會論と經濟學」參照

も具體的な經濟學が成立し得るのである。かくして廣く「智識を世界に求め大いに皇基を振起す」ところの眞の日本經濟學を確立し得るのである。

以上述べたところのものを十分に實行に移し以て日本經濟理論を具體的に確立することは一朝にして出来ることではないのであつてこゝには唯だこれが試案としての展開をなすにすぎないのである。

## 二 國民の富

經濟の中心概念は富である。これ經濟生活なるものは富の生産、分配、消費の生活なるが故である。この富なるものの本質を一言せんに、人間は心的物的生命統一體 *die psycho-physische Lebensinheit* である。故にそれが生存の爲めにもまた活動の爲めにも物的使用價值即物が物として人間に役立つ性質を要するのである。この物的使用價值には人爲に待たざるものも少なくないが、而も人間生活が進む程人間の勞働によつて生産されなければならぬものが益々多くなる。この人間勞働を待つて作出された物的使用價值が即ち富である<sup>1)</sup>。こゝには國民經濟理論に入るに先立つて國民の富の概念を一應明にして置く、このことも發展的考察によつてなされ得るのである。

人間の經濟生活に於ける最初の主體性は原始共同體である。従つて最初の富の概念はこの血族共同體の富である。即ちそれは血族共同體そのものの意識的なる共力に依つて生産せられたものであり、従つてこの共同體によつて意識的に共有せられこの共同體のために使用されるところのものである。我國民史に於ける大化の改新は氏族諸團體の土地、人民の私有を否定し班田收授の制を採用することによつてこの共同體經濟の概念を國民單位に

1) 拙稿「經濟本質論」(經濟論叢第三十七卷第一並に第六號)參照。

まで擴張せんとしたものである。こゝに「天皇を中心とする國民共同體」を主體性とする經濟がはじめて成立したのである。而も天皇の恩寵を被むる貴族、社寺等が不輸、不入の權を有する莊園經濟の主體性として高まり來れる時こゝに混亂狀態が惹起せられることとなる。

この古代末期の混亂狀態を克服する爲めには武士階級による權力的支配の確立が必要となつたのであるが、このことは一度成立せし「天皇を中心とする國民共同體」なるものを原理的に變更することなくこれを基礎とすることによつてなされた。即ちこの天皇より莊園に對する守護地頭の任命權を武將に與へこれを征夷大將軍に任命することによつて爲された。こゝに武士階級を主體性とする中世の權力經濟が發展し行くのである。

この封建制度に於ては全體を支配する權力を擔當する武士階級が經濟生活に於ても主體性となる。即ちこの權力階級は農夫等をして富を作らしむるのである。従つてその富は權力者の所屬し、權力階級によつて使用されるものである。農夫等はこの權力階級の恩惠によりその富の一部を與へられ生存せしめられるところのものでありかくて充分なる人格は認められず農奴的存在を享け得るにすぎないのである。かくて權力經濟に於ける富は權力階級が作らしめ、この階級に所屬しこの階級によつて使用される富である。これが全體主義の富の性質である。

この權力的秩序の下に於て人々の自覺は文化の普及と共に次第に高まつて來た。かく高まり來れる個々人にとつては、權力的支配が個々人の自由を束縛し、干渉するものとして、無用有害なるものとして感ぜられるに至つた。かくてこれまでの權力階級を主體性とする經濟に對し個々人を主體性とする經濟が主張せられることとなつ



た。これは個人主義經濟である。こゝに於ては孤立せる個人々人が各々生産するところの商品を互に交換することによつて物的に結ばるのである。これスミスが商業社會と云へるものでありまた人々は或程度に於て商人となる<sup>1)</sup>と云へるところのものである。そこに生産される富は商品となる。商品なるものは交換の爲めに作られ他人の使用に當てられるものである。この商品交換經濟は人々の日常の經濟生活を國民的更には世界的なる交換關係の中に織り込む。而も人々は單に物的に結ばれたのみであつて本質的には孤立して居るのである。従つてこの社會に於ては富なるものは個人により作られたものとして考へられる。従つて個人に所屬し、個人により使用せらるべきものとして考へられる。之即ち私有私用の富である。この個人的富の轉化として階級的富が考へられる。即ち生産手段が單純なものである限り個人々人はこれを私有して各々商品を生産し、これを交換することによつて生活する。單純なる商品生産社會と云はれるものである。然し生産手段が發展して社會の少數の人のみであつてこれを私有し得、大衆はこの生産手段の所有者に對して自己の勞働力を商品として提供しかつて得るところの貨幣を以てその生活に必要なものを購ふことによつてのみ生活をなし得るに至る。これ資本主義的生産社會である。この社會に於ては勞働力を購入しこれを自己の有する生産手段に結合して生産をなすところの資本家達より成る資本家階級なるものが事實上主體性となる。即ちこの階級の人々は自己が購ひたる勞働力と生産手段とを以て生産せしところのものは當然に自己に所屬し自己のために用ひ得るものであると考へる。これ即ち資本家階級の富である。この資本主義社會に於ける主體性としての資本家階級の勞働者に對する壓迫は次第に勞働者をして階級的意識を發展せしむることとなり、かくて資本家階級に對する勞働者階級の對立が次第に強化し來ることとなる。

1) Adam Smith, The Wealth of Nations. Book. I, Chap. IV.

この無産者階級の立場に立つ時、富は無産者階級によつて作られたものであり、従つてこの階級に所屬しこの階級によつて使用さるべきものであると考へられる。この無産者階級の立場に對し優れたる經濟學的表現を與へたるものがマルクスの *Das Kapital* (1867) である。この思想の骨子は富を以て勞働者階級の生産せるものなることを論證せんとする餘剩價值説 *Mehrwerttheorie* にある。即ち資本家階級の富を以て勞働を搾取せしところのものなりとなし、従つてこの寡奪者を寡奪することによつて資本家階級を否定し以て富をその本來の生産者たる勞働者階級に歸屬せしめこの爲めに用ひんとするのである。かくて共產主義に於ける所謂共產なるものの主體性は資本家階級を否定せし無産者階級なることを注意すべきである。

かくして個人を主體性とする富の概念はこの個人の集合としての階級を主體性とする富の概念にまで發展し且つこの階級の富に於ては資本家階級を主體性とする富の概念と無産者階級を主體性とする富の概念とが矛盾對立する。然し之等の概念は要するに個人主義社會に於ける概念であつて、その階級の概念も中世的の權力的統一の階級と異なり個人的集合的なるものである。かくして富の概念に於ける根本的な對立は權力階級を主體性とする富の概念と個人を主體とする富の概念の對立である。

然るにこの兩者の孰れも眞に具體的な富の概念ではない。即ち我國の富なるものは、我國民共同體に於ける生産的諸力をこの國民共同體の成員が統一し發揮せしむることによつて生産されるのである。この諸力は國民共同體の自然、勞働、文化に於てあるところのものである。この全體的なものなくしては富は生産し得られないのである。しかし之等のものをして生産力を發揮せしむるには、之等諸力を結び合はせ富を成立せしむるところのも

のが必要である。これ共同體の成員たる個の生活的活動である。かくて富なるものは個が全を生かすことによつて生産されるのである。かくて富の眞の主體性はそれに於て個と全とが内面的に結ばれて居るところの國民共同體自體である。久しきに亙る混亂狀態より武力によつて全體の秩序が作り出されたる中世に於ては、この全體を支持する権階級が偏重せられこれを主體性とする富の概念が成立したのであるが、これと反對に近世に於ては個が偏重されて個人を主體性とする富の概念が成立したのである。而も富の眞の主體は國民共同體自體である。即ち富なるものは國民共同體自體によつて生産せられ、それ故に國民共同體に所屬し國民共同體のために適用せらるべきところのものである。この國民の富の概念は單に考へ得るに止まるものではなく現實に働きつゝあるところのものである。即ち今日既に生活の必需品について見られたるが如く、個人主義的富としての商品の概念は今や次第に具體的なる國民の富の概念によつて否定されつゝあるのである。かくして之迄の富の概念も之を我國民史の發展に於ける最も具體的なる主體性としての「天皇を中心とする國民共同體」の立場より見直すときこの國民共同體の富の概念に止揚されることとなるのである。

### 三 國民的需要

需要なるものは經濟生活の出發點である。それは富に對する要求であつて何等かの力によつて表現される。この需要なるものが經濟生活の指導力となつて生産力使用の方向を決定し、又生産の結果の分配を決定するのである。この需要の主體性とその内容並に表現形式は時代によつて異なる。

原始共同體に於ける需要なるものは、この共同體を主體性とする需要である。その内容はこの共同體全般について並にその成員について必要とされる物的使用價值に對する要求であつて、その表現形式は情緒的直接的である。このことは同じく血族共同體であるところの今日の家族を主體性とする需要についても見られるところのものである。人類の原始的な生命も人々の幼少なる生命もか弱きものとしてかゝる共同體に於て初めて保護せられ成育せしめられ得たのである。

かくの如く原始共同體を主體性とする需要の特色はその内容が共同體全體の要求であり、その表現形式が直接的人情的なる點に存するのである。そこには未だこれら共同體を超えたる國民的需要なるものは見られない。此原始共同體の原理が大化の改新に依つて「天皇を中心とする國民共同體」にまで擴張された時、<sup>1)</sup>茲に始めて國民共同體を主體性とする需要が成り立つに至つた。即ち王土王民に立脚するところの班田收授の制度に於ては國民全體の生活の必要と國家全般の物的必要の充足が計られてゐる。こゝに國民共同體を主體性とする需要が見られるのである。然るに天皇の恩寵を被むる氏族、社寺等を主體性とする莊園が發達し來る時この班田收授の制が次第に破壊され、これ等のものを主體性とする需要が國民共同體を主體性とする需要を壓迫することゝなる。即ち國民的需要が民族的に歪曲されるのである。

この古代末期の混亂を克服するものとして高まり來れる武士階級を主體性とするところの中世の封建制度に於ては全體を權力的に支配するこの階級の必要とするところのものが權力的表現形式を以て表れる。これ權力階級を主體性とするところの需要である。この武士階級を主體性とする需要に對して國民大衆の需要は隸屬的なもの

1) 内田銀藏博士『日本經濟史の研究』第一六四頁以下參照

として取扱はれる。かくて全國民の需要なるものは權力階級を主體とする需要に壓迫されるのである。この封建的秩序の下に於て個々人の自覺が進むにつれこの壓迫が次第に自覺され来る。遂に全體主義的壓迫が個人主義的自由に打ち克たるゝことによりて市民社會が成立し来る。

個々人を主體性とする近世の市民社會に於ては、需要の主體も個人であつて、この個々人の物的必要の合計 *summe* が國民的需要となる。此需要の表現される形式は商品生産社會たるこの市民社會に於ては貨幣購買力である。即ち個々人の富に對する要求にして貨幣購買力を伴ふものが社會的に有效なる需要であつて、かゝる個人の需要の總和がその社會全體の需要である。而してかゝる需要が國民全體の生産力の使用の方法を決定すること中に於ける權力者階級を主體とする需要の場合と同様である。この兩者の孰れについても需要の支配力 *controlling power of demand* と云ふことが云はれ得るのであるが而もその需要の性質は時代の異なるにより異なつて居るのである。この社會にあつて個々人の購買力に餘り相違のない間は、かくの如き需要の支配力は全體の利益と矛盾しない。この限りに於て私益は公益と一致すると云はれ得る。然るに市民社會が資本主義的段階に進むならば有産者階級が發展し來りこれに對して無産者階級が増大し来る。かくて個人を主體性とする需要は階級を主體性とする需要となり、この需要の支配力は公益と矛盾するところのものとなるのである。これ同一の貨幣量によつて表現されるところの物的必要の度合は貧者階級にあつては富者階級に於けるよりも遙かに大であり、而も國民大衆は無産者階級なるが故である。この貧者階級に於ては極めて重要な物的需要も之を購買力に表現し得ざるものが甚だ多く、またたとひ表現し得ても甚だ微力なるものとならざるを得ない。即ちこの社會に於ては貧者

階級を主體性とせる需要は社會的に甚だ無力である。しかるに富者階級を主體性とする需要はさして重要ならざるものも大なる貨幣購買力を伴ふるが故に、社會的に極めて有效な力となつて現れる。かくて國民的生産力は有産者階級のために支配せられ、この階級は奢侈を恣にする側ら國民大衆は貧乏に苦しむこととなるのである。

この市民社會に於ける有産者階級を主體性とする支配はその壓迫の下に運命を共にする多數の無産者の間に有産者階級に對する無産者階級意識を次第に發展せしめることとなる。かくて無産者が階級自覺を有するに至ればこの階級の主體性が有産者階級の主體性と拮抗對立するに至る。この無産者階級の需要はその表現形式が市民社會的表現に留まる限り、先づ無産者階級の貨幣的收入に對する要求となつて現れるのであるが、次第に社會的正義の主張としての表現形式を取りきたる。茲に市民社會的貨幣的表現より直接的強力的なる表現形式へ移行するのである。かく市民社會に於て有産者階級を主體性とする需要と無産者階級を主體性とする需要とが對立する段階に至れば、市民社會は最早や自らの力に依つて秩序を維持する力を失ひその自律性を失ふのである。茲に會ての權力主義が新たな時代に現れ來る。即ち社會全體を強力的に支配する權力が高まり來たり、この權力の運用を擔當するところの權力階級が支配的地位に登り來たる。かくて國民經濟に於てもこの階級を主體とする需要が支配的となり、次第に國民生産力の全體をも支配することとなる。この權力階級の需要の表現形式は云ふ迄もなく權力的形式である。即ち國家權力を通じて表現せられ實現せられる。かくてこの市民社會の最後の段階に於ける需要は、近世的社會階級的なるものに中世的權力的なるものが相ひ重なる形態であつて、そこに權力階級を主體とする需要、有産者階級を主體性とする需要、國民大衆を主體性とする需要の三者が對立交錯してゐる。即ち權

力階級の需要は國家權力の内外に對する強力的行使のための需要を主とし、資本家階級の需要は利潤追求を主とし國民大衆の需要はその生活のための必需品を主とする。而も權力階級が今日の市民社會をそのままにしてそれを利用しその需要を充足せんとする時、この市民社會の支配者たる資本家階級の需要を國民大衆の需要の犠牲に於て重んぜざるを得なくなる。こゝにブルジョア・ファシズムの方向があらはれる。これと反對に權力階級が無産者階級を自己の爲めに利用することを必要とするならば、これと結んで社會主義國家の方向に進むことゝなる。茲に現代の不安定な構造が見られる。この相對立矛盾する階級的需要が止揚されざる限りこの不安は克服され得ないのである。

かくの如く分裂對立する階級的需要を止揚しうるところのものは、日本國民史を一貫せる眞の主體性としての「天皇を中心とする國民共同體」である。即ち國民共同體に於てはこれまで相對立せる諸々の階級的な主體性が共同體に於ける職分として止揚されるのである。此共同體に於ては資本家階級と勞働者階級との對立はないのであつて、一切が經濟者として共同體全體に必要な富を生産分配する職分をその能力次第に行ふのである。權力階級も同様に一全體としての國民共同體に於ける職分の擔當者である。要するに、共同體に於て働くところの總ての人々は、天下億兆一人もその所を得ざるもの無からしめんとされる。天皇の天職を各々がその職分として分擔し奉ることゝ於て、各自は同様である。唯だその能力の種類の相違により相異なる領域に於て能力次第の職分を分擔することとなるのである。故に民はその職分を實踐することによつて、天皇と一體となり、天皇を扶翼し奉るのである。かくすることに依つて總ての人を生かすのである。即ち個が全を生かすのである。我國民共同體に於

て個が全を生かし全が個を生かすと云ふことはかくの如く、天皇を中心とし奉る實踐に於て實現するのである。

この共同體の需要は中世的全體主義的な需要と近世的個人主義的需要との對立を止揚すると共にまたこの兩種の需要の性格を止揚する。即ち全體主義の需要はその主體性が權力階級であつて權力的に表現され國民個々人の需要はこれにより權力的に歪められ個性發揚の餘地が殆んどない。之に反し個人主義の社會の需要はその主體性が個々人であつて、一切は個人の判斷に委せられ、此點に於ては個性發揚の自由が存するのであるが、個々人の需要力は頗る不平等不確定であつて、權力社會に於て強制の下に何等かの程度の生活が強權的に確保されてゐるとは異なり、國民大衆は生活の絶對必需品に對する需要すら充足し得ない。従つてまた、全體の需要による國民的生産力の支配は無秩序状態となる。然るに國民共同體の需要はこの全體的確保の性格と個人的自由の性格とを併せ有するのである。即ち此國民共同體を主體性とする需要の内容は要するにその總ての人々を人間たらしめるに必要な富に對する要求であつて、これが全般的な要求としてまたは個性的な要求として表はされるのである。此國民共同體の働きは國民共同體に於る各領域の働きとして爲されるのであるがこの各領域が更に全が個を生かし個が全を生かすところの共同體的構成を有しこれに必要な需要を充足するのである。國民共同體はかかる諸共同體の共同體的一體である。それ自身目的としての文化價値を生産する教育、學問、宗教等の文化域の働きを全からしめんとすれば、各域に於て必要とされる物的設備が整備されることを要するがまた各域に於ける個々人が各自に於て用ふる必要あるものが與へられねばならぬ。かくて各文化域に於てその職分を擔當する人々はその働きを充分に發揮しうるのである。又その文化域としての働きがかくて全うされるのである。故にこれ等絶



對文化域に就いての需要はできる限り充分に充足されることを要する。廣く文化域と云はるるものの中、經濟等は手段價値を創造するものである。此域の需要はその正しき目的に對する手段として必要な限度に於て充足されるべきものである。但し人間の物的生産の犠牲を最少とならしむる爲めに生産力が無限に進歩することは極めて必要である。要するに各々の國民的活動域に於て、その働きが全うされるに必要な物の需要が有効に表現される必要がある。

國民共同體なるものは共同體の重層的構成を有するものであつて、それに於てはこれ等價値生産の立場より構成されたる此等價値共同體の外にまた家族共同體、これを構成要素とする農村又は都市等が生活共同體として強化される。これ等共同體の生活に必要な物的使用價値の要求も有効に表現されねばならない。而して諸價値共同體よりの要求との調和に於て國民共同體全體の需要を構成する。即ち之等物的必要に就いては各々の共同體より申し出でたるところのものを統一整頓し、これを國民共同體全體を公平に代表するところの國民共同體議會<sup>1)</sup>に於て審議決定し以て萬機公論に決する實を收め得る。これが國民的生産力全體を支配するのである。

以上は國民の富と國民的需要について一應の考察をなしたのみである。次に國民的生産について、尙ほ進んで國民的配給國民的消費について考察しなければならない。

1) その構成は別にこれを述べる。